

■菊池袖子(菊園) 歌人。農民ながら、貴族から歌才を愛でられて交流、“伊豆の袖子”として“加賀の千代”と並称された。

きくちそでこ

蝦夷初調査・1785= 伊豆国君沢郡熊坂村で、肥後菊池氏を祖とする名門の豪農菊池安兵衛武教の長女に生まれる。

田沼意次失脚1786= 1歳：

昌平饗で柴野栗山とともに学び、漢学者と交流して膨大な蔵書を持つ父の感化を受けて育ち、

混浴禁止・・・1791= 6歳：父から「孝経」を、

松平定信引退1793= 8歳：

杉ノ宮 正月・1794= 9歳：「四書」を学んで、その聡明さが知られるようになる。この頃、作歌をはじめ、

その才能を知った父が漢籍よりは歌道をと、

古事記伝・・・1798=13歳：加藤千蔭を訪ねると即座に認められて入門、以後、国学を修めながら和歌の添作をうける。

7月カ船来航始1803=18歳：*丹波の法常寺の僧が関東に下向した折に、歌才を知られ、帰京して当代一の歌人大納言風早実秋に伝えたことから、実秋にたびたび上洛を勧められ、'罪ふかき女の身こそかたしけれ行くもかへるも心ならねば'と詠んで辞退するも、

青洲麻酔手術1805=20歳：実秋の同人に加えられ、以後、歌の交流が進む。

いざ乃報復・1806=21歳：婿養子と結婚。

間宮海峡発見1808=23歳：師の加藤千蔭が死去、'なべて世にしぐるる雨をこの秋はいよよにのみと思ひけるかな'。

浮世風呂・・・1809=24歳：*中納言芝山持豊ら公卿から名歌を贈られるなど、“伊豆の袖子”の名が都に知れ渡り、

高田屋拿捕・1812=27歳：この頃には、*千種大納言が江戸に下向した際や伏見宮から使いの者が菊池家を訪れ、大奥たちからも歌を求められるようになるが、

浮世床・・・1813=28歳：長女が死去、

黒住教・・・1814=29歳：続いて長男も死去するという不幸にも見舞われ、

水野忠成老中1818=33歳：

蝦夷地直轄終1821=36歳：

富籤流行・・・1830=45歳：

鼠小僧磔・・・1832=47歳：この年、木城花野が入門するなどしたが、

病臥することが多くなり、

大塩平八郎乱1837=52歳：

適塾オープン・1838=53歳：没した。

没後、「遺徳集」二巻・「菊園集」三巻・「続菊園集」一巻が刊行され、他に「ちとせの日記」を残す。東京調布市の白百合女子大学には、生家が遺され、{めぐみ荘}と呼ばれている。

「人づくり風土記(静岡)」、